青の乙女と白髭

Dns

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の乙女と白髭

【Ｎコード】

Ｎ８１２４Ｙ

【作者名】

Ｄｎｓ

【あらすじ】

最終決戦の後消滅するはずだったアルフィミィはなんの因果かワンピースの世界へ。ｏｇ２からの分岐です。

1．終わりと始まりですの（前書き）

書いてしまいました。もういっこの方が滞っているのに。設定に関してはちょっと無茶なことも入ります。あとかなりキャラ崩壊がひどくなる予定です。広い心で見てください。

1．終わりと始まりですの

徐々に期待が燃えていくのを感じる。同時に崩壊も進む。どちらが先に私を殺すのか、できれば燃え尽きたほうが楽でいい。ほんの少しだけ共に戦った仲間たちに別れを告げたアルフィミィはそんなことを思っていた。ほかのアインストよりはよく持っているが死ぬのは時間の問題だろう。後悔はない、敵対した時からこの運命は覚悟していた。むしろ勝利に貢献できたし、仲間と認めてもらえた。あんなにひどいことをしたのに。それがうれしい、同時に悲しくもある。なぜなら、以前は知りえなかったことを理解してしまったから。だから、

「家族、ほしかったですの」

そう、あの仲間たちの中に家族のために戦う人がいた。家族、システムとしての群体ではなく、絆に元ずく集合。それは、とても眩しくて、うらやましかった。特に私は極めて人間に近い。だからアインストの中でも特に孤独だった。もっともほかのアインストには個がないが。仲間よりも深い、そんな絆。ないものねだりなのはわかってる。人ではない私に家族はいない。同族は全て滅んだ。本当にたったの一人、ふと仲間たちが私の死を悼んでいるのを感じる。うれしい、けれどやっぱりどこかさみしい。言い方は悪いが結局は近しい他人。そう思うと、みんながうらやましい。だってみんなには家族がいる。私にはいない。だから、だから少しだけ願った。家族がほしいと。奇跡の勝利を得たのだから、この位かなってはくれないのだろうか。そんなことを思った。そこで私の意識は消えた。

何故か消える瞬間、ペルゼインが笑った気がした。

ふと気が付くと、どこかに寝転がっているようだ。死後の世界、そんなことが頭によぎる。一応知識ではもっていた、人間の妄想だが。だけど、ここはひどく寝ごごちが悪い。いや、むしろ痛い？そう思った瞬間目を開ける。広がったのは一面の青い海と空。どうやら私は岩場で寝ていたらしい。道理で寝心地が悪いわけだ。

「というか、ここどこですの？」

疑問を口に出すが当然誰も答えない。あの時、間違いなく私は滅んだはず。ただ死ぬのではなく、チリひとつ残さず消える。それが私の終わりだったはず。なのに今生きている。呼吸が、鼓動が、私は生きていると証明する。ふと気づくと手には鬼蓮華が‐ご丁寧にも人間向きのサイズで‐握られていた。

「ますます意味不明ですの」

さすがに鬼菩薩はないが、身を守るには十分である。どころか、

「念動力に、これは超感覚？なんでこんなもの使えるんですの？」

持っていなかったはずの力、特に念動力は自分を浮かせ、さらには

短距離テレポートまでできる。ためしたらあっさりできた。当然のようにマブイダチも放てる。実際放ったら轟音と共に海が割れた。ぶっちゃけ無茶苦茶である。リオンぐらいなら一人で倒せそうである。

「この力は、もしかしてペルゼイン？」

かつての自らの愛機、否、半身に思いを馳せる。理屈の通った説明は出来ない。でもこの命は彼に与えられた、そんな気がするのだ。

「だったら、きちんと生を全うしませんとね」

でもさすがにオーバーキルな気もする。改めてこの世界のことを考えるとそう思うのだ。だって機動兵器どころか、飛行機ですらさっきから見あたらないのだ。超感覚もそう言っている。ならばこの世界は人間サイズが基本である。

「まぁ、あって困るものでもありませんし」

ここまで思考をまとめて気づく。すぐそばに人がいると。そこで驚いてしまう。まだきちんと調べたわけではないが半径1キロぐらいにいる人間に気付かなかったのだ。かなりの達人、しかも明らかに警戒している。でなければ気配を消しはしないだろう。とにかく声をかけてみる。

「誰、ですの？」

ずんっと音がしそうな巨体が現れた。前言撤回、鬼菩薩が欲しい。自分が言うのもなんだが、人間なのだろうか。目の前の男は巨人というにふさわしい、否むしろ魔人だろうか。そういえば女の子の姿をしたロボットがいたなぁ、と軽く現実逃避。頭にはバンダナがまかれている。顔つきからして三十代前後だろう。・・・多分。上に来ているチョッキが明らかにサイズがあっていない。つーか今すぐはちきれそうだ。

「オメェさん、何もんだ？」

考えていたら質問が帰ってくる。

「質問に質問は失礼ではありませんの？」

「あぁ、そうだな」

男は頭を掻く。意外と話は通じる？
「俺ぁ、エドワード・ニューゲート。海賊だ。つっても独立したてで一人だが」
えーと、かいぞく？世間自らずな私でも、それがいかに時代錯誤な言葉かはわかる。というか、この人私は犯罪者ですって言っている。いきなり不安だ。
「私は、アルフィミィと申しますの」
内心を悟られぬように務めて冷静に答える。
「アルフィミィか、良い名だな」
基準がわからない。社交辞令なんだろうか。そっちの名前は何というか。前半はともかく後半はとんでもない。ニューゲートて、人名に使っていいいのだろうか。
「そちらはなんとお呼びすればよろしいでしょうか？」
「エドワードでもエドでも好きに呼べばいい、それでだ」
なんだろうか。
「とりあえずここじゃなんだから、少し奥にいかねえか、快適な場所とは言えねぇがここよりはましなはずだ」
これは、まさか、しかし
「ん？どした？」
「奥で何をしますの？」
「いや少し話を聞こうかと」
「にかこつけて私にアレやコレやするつもりですのね」
「はぁ？」
「しかも、私みたいな体型の幼女を、そうか、これがロリコンなのですね」
「ちげぇ！！つーか普通は売られるかの心配するだろうが」
「な、なんてど外道なんですの」
「しねぇよ、ってか話が飛躍しすぎだ。オメェにゃそんなこと感じねぇよ」
「つまり・・・」

「なんだ」
「童貞、童貞ですのね」
「なぜそうなる！！」
「好みの女性を前にして行動にでられない、噂に聞く童貞の行動ですの」
「そもそも何でロリコンがそのままなんだ、俺はもっと大人の女が好みだ」
「変態は皆そういうそうですの」
「ひどくなってる！？」
「変態で童貞、救いようがないですの」
「どっちもねぇよ！！童貞なんて１５の時に捨てたわ！！」
「つまり経験済みの変態」
「変態じゃねぇ！！人の話を聞けぇ！！」
「嫌ですの」
「即答！？ってか途中からわざとだろ」
「違いますの」
「何？」
「最初からに決まってますの」
「ふざけんな！！！！」
「ふざけてます！！！」
「な」
たしか、エクセレンはこんな感じで話していたと思う。やってみてわかるのだが、楽しい。
「くそ、なんなんだオメェは」
「アルフィミィですの」

後に世界最強の親娘と言われることになる二人。そんな二人の出会

いはちっとも運命的ではなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8124y/

青の乙女と白髭

2011年11月24日00時49分発行